

『こころ』良心と自尊心

Junko Higasa 2015.7.11

先生は、K だからこそ御嬢さんを譲る訳にはいかなかった。全く知らない他人に取られるなら、おそらく先生は、自分の気持ちを言い出せないまま、御嬢さんを諦めただろう。しかし自分の愛する人と親友が結婚するとなると、先生は友情を保てないどころか、その煩悶に生涯苦しむことになる。「恋と友情」の二重の愛の喪失による自己抑圧、それが先生を利己心に走らせた。そして愛する人には、自分を優れた者として認識してもらいたいという自尊心が、K に謝らなければならないという良心を抑えた。

漱石は、良心を「自然」と表現した。もし K と二人きりなら良心の命令に従って謝れただろう。『しかし奥には人がいます。私の自然はすぐ其所で食い留められてしまったのです』そして奥さんから結婚話が K に伝わった。『しかし今更 K の前に出て、恥を搔かせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした』そして K が死んだ時、奥さんの顔を見て不意に『済みません。私が悪かったのです。あなたにも御嬢さんにも済まない事になりました』と我とも知らずに謝った。『つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです』

「しかし」「しかし」「つまり」このように人間の「自然」である良心は、「不自然」な人工物である自尊心に圧迫された時に、その機能を失うものらしい。それでも良心は呵責という刺を持っている。